

カトリック河原町教会だより

2018年1・2月

「見よ、主は御目を注がれる」 詩篇33・18

2018年も 主とともに

「信仰はわたしたちの問題をすべて打ち払う光ではありません。むしろ、それは闇の中でわたしたちの歩みを導くともしびです。そしてこのともしびは、歩むために十分な光です。苦しむ人に対して、神はすべてを説明する理由を与えてくださいません。しかし神は、ともにいて同伴するというかたちでこたえてくださいます・・・ご自分のまなざしを与えてくださいます。それはわたしたちが神のまなざしをもって光を見ることができるようにするためです」 (教皇フランシスコ『回勅 信仰の光』p88より)



ヴァルトミュラー画「サマリアの女」

司教座教会献堂記念日感謝ミサをささげて



12月3日は、当教会守護聖人である聖フランシスコ・ザビエルの記念日です。昨年、献堂50周年記念日を迎えて12月3日が新たな司教座聖堂献堂記念日と定められ、大塚司教司式で感謝のミサがささげられました。

またこの日は待降節第一主日でした。大塚司教は先日の教皇のミャンマー訪問に触れ、差別され虐げられている人々の現実や、さまざまな世界の問題に関わることはキリスト者の務めであると語られました。そして、私たちも身近なところで何ができるかを考え「時のしるしに目を向け、神の声に耳を傾け」、今日から始まる待降節を「祈りと犠牲」をもって過ごすようにと励まされました。

また、ミサの最後にカトリック会館の取り壊し、聖堂の補強工事計画について、今後の方向と課題を報告されました。

(編集委員)

「イエスを囲む群衆」

イエスはいつも、群衆に囲まれていた。「大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れ」(マルコ6章34節)んだ。

群衆は、生きる力を失っていた。イエスは、そんな群衆の生きる力を回復した。群衆の心と体を生きる力で満たした。迷っている群衆に、進むべき道を示した。群衆は、イエスにいやされることで、パンをもらうことで、神の愛に満たされた世界が実現するという良い知らせを耳にすることで、生きる力を取り戻した。

しかし、同じ群衆が、イエスの受難の時、イエスを死に追いやる。イエスから生きる力を得た群衆が、イエスを「『十字架につける』と叫び立てた」(マルコ15章14節)。イエスの愛がもたらした生きる力は、イエスへの憎しみの力に変わってしまう。イエスが愛した弟子たちも、群衆の側に加わる。イエスを見捨てることで、イエスを知らないと言うことで...

十字架上で殺されたイエスは、起き上がり、墓から出て、再び旅を始めた。イエスが向かったところ、そこは、ガリラヤ、あの群衆が待つガリラヤである。



洛東ブロック担当 一場 修 神父

「あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」(マルコ16章7節)。ガリラヤでイエスは、いのちを与え続ける。自分を十字架につけた群衆に...

群衆とは、私たちのことだ。私たちは皆、イエスから生きる力をもらった。しかし同時に、イエスを十字架につけている。毎日死ぬことしか考えていないと言って助けを求める人を避けることで、ずっと苦しんできたという訴えに聞こえないふりをすることで、最初は親切にしても、途中で放置することで、何かをしてあげても感謝がないと、怒りに燃えることで...

しかし、そんな群衆である私たちの中に、イエスは生きている。私たちは、イエスを囲んでいる。今も、イエスから生きる力を得ている。イエスに会えるところ、ガリラヤは、今、私たちが生きているところである。

教会は、今、「年間」という時を過ごしている。この恵みの時、私たちは、自分たちが群衆であることを思い起こしたい。ガリラヤに生きていることをしっかりと心に刻みたい。

待降節黙想会から～「生まれる・死ぬ・祈る・食べる」～

2017年12月2日(土)10時から菅原神父指導のもと、「待降節の福音を読む」をテーマに待降節黙想会が行われました。この日の参加者は約75名で、午後3時からミサがささげられました。[以下は講話要約です]

■ 第1主日の福音 マルコ13・33～37

宗教の言葉は、いわば「物語」「お話」です。物語であるゆえに何の根拠もなく読むことができ、それに心が動かされて本当に大切なものを知った時、他のすべては相対的なものになってしまいます。そこに物語、お話の醍醐味があると言えるでしょう。黙想会はお話を聞き、神と心静かに過ごす時です。

まず使徒信条をみてみます。ここには「**神を信じます**」と二行の記載があり、「**聖霊を信じます**」は一行記されているのみです。「イエス」については、マリアから生まれ、十字架上で死に、葬られ、陰府に降り復活し・・・と長く続きます。ただイエスが、地上で何をしたかについては、何ひとつ記されていません。すべて無視です。人間の場合も同じで、この世で何を成し遂げたかは肝心なことではありません。肝心なのは、使徒信条のイエスの記載の通り「**生まれる**」と「**死ぬ**」、そこだけです。

人間的時間で考えるなら、イエスは二千年前に死んで復活し、今は全能の父の右の座に着いておられます。使徒信条の最後には「裁くために来られます」と、現在のイエスの状態、再臨の予告がされていて、それは私たちが待ち望んでいる救いの完成です。教会の典礼暦は終末に始まり終末に終わります。

ここでキリスト教終末思想の大切な点は、「**永遠の今**」ということです。神の時間は「永遠の今」。神には「今」しかありません。大切なのは、実は私たちは「**今、終末を生きている**」、そこなのです。今が終末、今が世の終わり。なぜなら私たちが神と出会えるたったひとつの時は「今」であり、最後の審判で裁かれているのは今のこの私だからです。終末を待ち望むということは先のことではなく、神と共にある「今」を大切に目を見まし、いつも神様を念(今と心から成る)じて生きる、そういう生き方ではないでしょうか。

■ 第2主日の福音 マルコ1・1～8

第1主日は「終末」の話でした。典礼暦の一年の始まりが終わり、終わりが始まりという話です。たとえば結婚式を連想してください。二人の新しい旅立ちが始まりであると同時に、自分に死んで相手のために生きようになるという意味では墓場、終わりと言えます。卒業式も同じように、終わりであると同時に始まりです。

時間というものには、普通に続いていくであろうと思われる時間(クロノス)と、かけがえのない「今」という時(カイロス)のふたつがあります。私たちは自分のプログラムや計画で埋めつくされている時間である「クロノス」をすべてと思いこみ、そこに閉じこめられてしまいがちです。いつまでも続くであろうと考える線の様な時間「クロノス」、それに対し、その中に神様がグサッとクサビを打ち込まれる時が「**カイロス(時機)**」です。クロノスの中に閉じこめられている自分は、「自分の人生は退屈だ、物足りない」とさえ思ってしまう。しかしカイロスがあることを知っているだけでも、そこから解放され、見方は変わるのではないのでしょうか。

洗礼者ヨハネが現れて、イエスに洗礼を受け、そこからイエスは神の国の福音を宣べ伝え始めます。その時のイエスの最初の言葉が「**時は満ち、神の国は近づいた**」です。

イエスの言う、この「時」こそが「カイロス」です。私たちにはこのカイロスを見分ける感受性が必要です。人間はカイロスであるものを、自分にとって明日も続くクロノスの“ひとこま”にすぎないように考え、カイロスを見分けることができないことがあります。「カイロス(時機)」こそ、イエスの言う「時は満ちた」の「時」であり、それは神の国とつながっています。

このカイロスを見分ける感受性はどうしたら磨けるのでしょうか。そのために最も大切なのは「**祈り**」です。祈りにはマニュアルも技術も、上手も下手もなく自分の方法でよいのです。ただひとつ大切なことは、祈りをやめないということです。聖書の「やもめと裁判官」のたとえ話のやもめのように、決してあきらめないで祈り続けること。たとえそこに充実感など感じなくても、その時間が無駄に思えることがあっても、祈ることによって神との信頼関係は確実につかわれていきます。

肝心なのは「**生まれる**」と「**死ぬ**」、そして「**祈る**」です。祈りは「生まれる」と「死ぬ」、こちらの次元につながっており、このふたつの仲間です。この世で「ああしよう、こうしよう」ということはすべて“スルー”です。キリスト教は、決して地上のことを軽視する教えではありませんが、それ以上に、この地上のことがすべてであるという教えではありません。どんな状況でも自分には祈りしかない、これしかできないと祈り続ける、やめない、これが何より大切です。

■ 第3主日の福音ヨハネ1・6～8,19～28

私たちが「**あなたは誰ですか**」と問われた時、私たちは地上での自分の立場とか経歴、また何をしているのかなどを答えてしまうのではないのでしょうか。しかし、地上での立場や地位、業績は地上で、ただくつついただけのものにすぎず私のすべてではありません。もっと大切な「私」がある。洗礼者ヨハネは「あなたがたの中には、あなた方の知らない方がおられる・・・私はその方の履物の紐を解く資格もない」と答えています。「**私の中の私の知らない私**」。これが、宗教が問題としている「私」です。

禅宗の『臨済録』という書の中に「赤肉団上(しゃくにくだんじょう)に一無位真人(いちむいのしんにん)あり」という言葉があります。無位とは、この世の地位や立場は重要ではなく、私のうちに無位の真人が宿り私の中にいる、という意味だそうです。ここで、私の知らない私を知るといような「悟り」が重要なわけではありません。キリスト教のすごいところ、中心にあるのは「**イエスの十字架と、それに結ばれたご聖体のみ**」です。この贖いの神秘、過ぎ越しの神秘を私たちの頭で理解することは到底できることはありません。それでも、私たちは贖い主イエスをまるごと「**食べる**」ことができ、主と完全にひとつになることができるようにされました。十字架と死を通して私たちにこんなにもありがたい恵みをのこしてくださったイエスへの感謝のうちに、沈黙の時を過ごしましょう。



■ 第4主日の福音 ルカ1・26～38

第4主日の福音は受胎告知の場面ですが、マリアはここで一体何をしているでしょう。何もしていません。神の言葉を、従順にただ受け入れただけです。何かを自分で考え、行動に移すという意味では何もしておらず、ひたすら「受動的」です。そのマリアの姿勢に光を当てたいと思います。

使徒信条ではイエスの地上でのわざは全部無視されています。宿らされ、生まれ、十字架につけられ、葬られ、とすべて受動的なことがらに尽きています。英語のPassive(=受動的)であり、これはPassion(=キリストの受難)と語源が同じです。

ここで“働きアリ”の生態について話します。巣の中のアリを観察すると、約8割は働かないそうです。次に働いている2割のアリを別の場所に移して観察してみると、今まで働いていたアリのうち、約8割は働かないアリになるという研究報告があるそうです。この自然界の観察結果は、「何もしない」ということについて、私たちに大きな示唆を与えてくれます。この「何もしない」ということは、私たちの内面にとって、実は重要な役割を果たしていると言えます。「何もしないということが、私を支えている」、そのことを見落としてはならないと思います。

以前座禅を体験した時、お坊様から「何も考えるな」と言われた言葉を、私はどうしても実行できませんでした。元よりこれは不可能なことらしく、それは、いろいろな雑念が浮かび上がってきても雑念に能動的にならないこと、さらに思い巡らすことをやめよという勧めです。浮かんでくる思いを「ただ、受動的に、見よ、見よ」に徹するようにという教えのようです。

聖書についても私たちは、読んで深く考えたり思い巡らす、そんな読み方は大切にされています。そういう黙想も大切である一方、キリスト教は啓示宗教ですから、神が啓示されたものを「そのまま見る」ことが大切です。神様の啓示は、私たちが今普通に見ている世界、体験しているもの、自分の肉体も含め森羅万象すべての中にあらわされています。霊的指導者として知られるイエズス会のアントニー・デ・メロ神父は、「神から見せられるものをただ見る、何もせずそのまま見る」、その受動性が「沈黙であり啓示である」と語っています。

また伝統的にこのような言い方があります。「神は2冊の本をお書きになった。1冊はこの『世界』で、もう1冊は『聖書』である」。この世界もそのまま見る、聖書もそのまま受動的に飲み込んでしまう、そんな読み方もありかと思います。それは「み言葉を食べる」ということです。食べ物は、味わっても味わわずに食べたとしても、必ず血となり肉となり、私たちを生かす力となるでしょう。

(講話要約/編集委員)



伏見キリシタン史跡巡りの一日 ～「河原町教会男性の集い」～



イエズス会伏見教会への小道で

「男性の集い」は信徒の要望により昨秋新しく立ち上げられた集いです。毎月第2主日10時半のミサ後に例会を開催しており、現在会の名称も募集中で、信徒の皆様の参加を期待しています。今回は親睦を兼ね、初めて伏見のキリシタン史跡巡りに出かけてきました。男性の集いには是非ご参加ください。

「キリシタン ゆかりの地を訪ねて」

小林 勝彦

12月9日(土)、「男性の集い」8名は親睦を兼ね、伏見に点するキリシタン史跡巡りをしました。

中書島にある長建寺のキリシタン灯籠を、ついで大倉記念館では伏見城下の古地図とキリシタン灯籠を見学しました。そして、向かいの高山右近の屋敷跡(現南浜小学校)に通じる「信仰の小道」を歩きました。それは幅員およそ2.4メートル、長さ約10メートルのまさに“小道”で、しばし右近の信仰に想いをはせました。

昼食後は京阪電車を乗り継いで、まず伏見教会を聖体訪問し、伏見稲荷大社近在の料理家「玉家」の玄関前にあるガラシア灯籠を見学しました。灯籠は独特の造りで、上部に鳩、右側に小羊と蛇があしらわれていました。それは「鳩のごとく謙遜に、小羊のように従順に、蛇のごとく賢くあれ」というみ言葉を想起させるものでした。地中には「ガラシア」の文字が刻まれているそうです。

その後、六条河原の「元和の殉教者」碑の前では、殉教者のために祈りをささげました。そして散会しましたが、この史跡巡りを通して、信仰のありようを改めて見直すことができた巡礼となりました。



(写真上)ガラシア灯籠

(左)月桂冠大倉記念館で

2017年のクリスマスアルバムから

■ クリスマス チャリティーコンサート 12.17 (日) 15:00

ソプラノ女声二重唱、京都ノートルダム女子大学ハンドベル部の演奏、教会聖歌隊合唱、桑山彩子さんパイプオルガン演奏、京都聖母学院小学校合唱部コーラスと盛りだくさんのプログラムでした。ご降誕前のひと時、聖堂には美しい音楽が響きわたり、最後は皆でキャロルを歌いました。今回のチケット売上金は、2017年7月に起きた九州北部豪雨災害復興支援として福岡教区に送られました。支援金の総額は210,000円でした。皆様の温かいご協力に感謝いたします。(クリスマス実行委員長 李家隆美)



橋本仁子さん(左)と東朝子さんのソプラノ二重唱



京都ノートルダム女子大学ハンドベル部の演奏



オルガニスト桑山彩子さん



京都聖母学院小学校合唱部のコーラス



聖母学院の子どもたちの歌声に聴き入る会衆

☆聖母学院小学校合唱部はNHK全国合唱コンクール決勝に3回出場、2014年には銅賞受賞。他のコンクールでも度々受賞しています。モットーは「歌で皆を幸せに」。

■ 土曜学校クリスマス会 12.16(土)

この日、土曜学校のクリスマス会が行われました。「子どもとともにささげるミサ“クリスマスバージョン”」のあと、小学生の子どもたちによる「ご降誕劇」、そして「プレゼント交換」など、少し早いクリスマスを保護者の方といっしょにお祝いしました。(教育部 奥埜さと子)



練習を重ねた土曜学校子どもたちの「ご降誕劇」を終えて



楽しそうな菅原神父の説教風景

■「クリスマス市民の集い」 12.24(日) 18:30

24日は夕刻から雨になりましたが、聖堂は多くの参加者でいっぱいになりました。「クリスマスコンサート」に始まり、「クリスマスの祈り」では菅原神父が説教を担当、派遣の祝福、退堂の後、皆で「クリスマスキャロル」を歌いました。



■ 12.24「主の降誕」夜半ミサ、12.25「主の降誕」日中ミサと英語ミサがささげられました

「主の降誕」では、夜半ミサと10時半日中のミサは大塚司教の司式で行われ、7時のミサ（一場神父司式）と12時からの英語ミサ（ウィリアム神父司式）もささげられました。10時半のミサ説教で司教は次のようなお話をされました。

「現実の世界をおおっている深い闇は天地創造の闇を思い起こさせます。カオス、混沌の闇の世界に『光あれ』との言葉が発せられました。それはこの世界の人間の絶望的な罪と闇の中に現れた光です。その光は心の目、神のまなざしで見ることを可能にする命の光であり、すべての人を照らす光でした。今日の福音を通してヨハネが伝えたかったのはこのことです。神は、闇の中にいる私たちの救いのために人間となってくださいました。それが、神の子イエスの誕生です。私たち一人ひとりの心の闇を御子の命の光で照らしていただき、神からいただく平和を心に留めて歩んでいきましょう」。(編集委員)



主の降誕10:30のミサ



ウィリアム神父司式の英語ミサ

司教座聖堂建立50周年記念事業のご報告

新聖堂建立50周年にあたり特別献金をお願いしましたところ、目標の300万円を大きく上回るご協力をいただきありがとうございました。6月17日明治村記念ミサ、6月18日感謝ミサ・祝賀会等下記の通り記念事業を行いました。なお、その他予定しておりました聖堂内の液晶モニター、聖堂いすカバーの交換などは、ロイヤルホテルの建て替えの問題が起こり、延期することといたしました。

(財務部役員 越知謙之助)

収 入	特別献金	3,540,897 (円)
支 出	カゴ台車	89,100
	明治村記念ミサ	212,720
	50周年祝賀会	84,976
	写真展	18,989
	オルガンコンサート	185,580
残 高		2,949,532

◇ 2018年 1月～3月の行事予定 ◇

(予定は変更になる場合があります)

月	日	曜日	行 事 予 定
1	1	月	[神の母聖マリア] 元旦ミサ 7:00・10:30 世界平和の日
	7	日	[主の公現] 評議会1月例会 10:30ミサ後
	8	月	[主の洗礼]
	14	日	司教英語ミサ12:00 (ブロック訪問) ミサ後 司教講話
	18	木	キリスト教一致祈祷週間(1/25まで)
	21	日	[年間第3主日] 司教訪問ミサ 9:00(山科教会)
	27	土	洛東ブロック会議(山科教会) 14:00
2	28	日	[年間第4主日] 世界こども助け合いの日(献金) 村上透磨神父霊名(トマス・アキナス1/28記念日)のお祝い 7:00ミサ 河原町教会総会 10:30ミサ後 (ヴィリオンホール)
	2	金	[主の奉献]
	3	土	[福者ユスト高山右近殉教者]
	4	日	[年間第5主日] 河原町教会評議会2月例会10:30ミサ後
	5	月	[日本26聖人殉教者]
	11	日	[年間第6主日] 26聖人殉教者顕彰ミサ 14:00 (西陣教会) 世界病者の日
	14	水	[灰の水曜日] (大斎/小斎)
3	18	日	[四旬節第1主日] 洗礼志願式 10:30ミサ
	25	日	[四旬節第2主日]
	4	日	[四旬節第3主日] 河原町教会評議会3月例会10:30ミサ後
	11	日	[四旬節第4主日] ブロック四旬節黙想会とミサ 10:00 (伏見教会)
	17	土	[日本の信徒発見の聖母]
	18	日	[四旬節第5主日] 一場神父霊名(オスカル・ロメロ3/24記念日)のお祝い 10:30ミサ
	25	日	[受難の主日] (枝の主日) 世界青年の日
	26	月	～28 日) 教区小学生侍者合宿
	28	水	教区聖香油ミサ 11:00(河原町教会)
	29	木	[聖木曜日] (主の晩餐) 19:00 ミサ
	30	金	[聖金曜日] (主の受難) 19:00 ミサ(大斎/小斎) 聖地のための献金
	31	土	[聖土曜日] (復活の聖なる徹夜祭) 19:00 ミサ

2018年度 役員と5部会責任者

	役 員	部 長	副部長
典礼部	北村 進	岡田 亨	杉本 誠一郎
教育部	中島 真理	奥埜 さと子	中野 博彦
財務部	越知 謙之助	倉狩 弘美	徳本 佳子・岩田 啓子
施設管理部	羽多野 朱美	栗山 准	松谷 博幸
広報部	岩間 恵世	神藤 牧	嶋崎 晴信

司教小教区訪問 英語ミサと講話

司教小教区訪問の1月14日、河原町教会では、12時から大塚司教司式による英語ミサがささげられました。ミサ後は、ヴィリオンホールで「ラウダート・シ」についての講話と対話集会有り、大塚司教は英語でメッセージを語られ、参加者は皆熱心に耳を傾けていました。



◆広報部から:2018年から「河原町教会だより」は二ヶ月に一回の発行予定です。
なお、評議会議事録要約は別紙プリントでお知らせいたします。

河原町教会 ミサの時間

日曜日 (主日のミサ)

7:00

10:30

*英語ミサ 12:00 (第2・4週)

月曜日 6:30

火曜日 6:30

水曜日 6:30

木曜日 6:30

金曜日 18:30

土曜日 6:30 18:30

(主日のミサ)

信仰の学びのお知らせ

◇信仰入門講座◇

(1F集会室)

水曜日15:00 (祝休) 一場 修 神父

木曜日19:00 (祝休) 一場 修 神父

金曜日10:30 (祝休) 一場 修 神父

19:15 村上 透磨 神父

金曜日17:30[洗礼準備講座] 菅原 友明神父

土曜日17:00[洗礼準備講座] 菅原 友明神父

※洗礼準備講座をご希望の方は教会事務室までご連絡ください

◇洛東ブロック信徒養成講座◇

【河原町教会】第1土曜日19:30～20:30

菅原 友明神父

【伏見教会】毎火曜日10:00ミサ後～11:30

一場 修神父

毎木曜日14:00 菅原 友明神父

【桃山教会】毎火曜日15:00 菅原 友明神父

◇南部地区信徒養成講座◇

(6F会議室/毎月1回水曜日)

大塚 乾隆神父「典礼を学ぶ」

1月10日(水) 10:30～11:50

2月 7日(水) 10:30～11:50

◇南部地区信徒養成講座◇

(1F集会室/毎月1回木曜日)

北村 善朗神父「祈りを学ぶ」

(休講)

◇主日の福音を読む集い◇

(3F・301号室)

毎週日曜日9:30～10:15

※どなたでもお気軽にご参加ください。